

4-1. 電場が式 (4.5) で表されるとき, 磁場が式 (4.6) となることを示せ.

解答 入射電場 E_i を

$$E_i = A_i e^{i(\mathbf{k}_i \cdot \mathbf{r} - \omega t)} \quad (4.5)$$

と表したとき, 磁場 B_i が

$$B_i = \frac{\mathbf{k}_i \times \mathbf{A}_i}{\omega} e^{i(\mathbf{k}_i \cdot \mathbf{r} - \omega t)} \quad (4.6)$$

となることを示す. マクスウェル方程式 (2.29a) より

$$\nabla \times \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}$$

なので, これが成立しているかを確認する.

左辺に (4.5) を代入すると

$$\nabla \times \mathbf{E}_i = i\mathbf{k}_i \times \mathbf{A}_i e^{i(\mathbf{k}_i \cdot \mathbf{r} - \omega t)}$$

であり, 右辺に (4.6) を代入すると

$$\begin{aligned} -\frac{\partial B_i}{\partial t} &= i\omega \left[\frac{\mathbf{k}_i \times \mathbf{A}_i}{\omega} e^{i(\mathbf{k}_i \cdot \mathbf{r} - \omega t)} \right] \\ &= i\mathbf{k}_i \times \mathbf{A}_i e^{i(\mathbf{k}_i \cdot \mathbf{r} - \omega t)} \end{aligned}$$

となり, マクスウェル方程式 (2.29a) が成立していることがわかる.

4-2. 3次元の伝搬方程式 (3.31) から, 式 (4.23) を導け.

解答 式 (3.31) の $\partial^2/\partial z^2$ を ∇^2 に直して, E_t に関する3次元の伝搬方程式にすると

$$-\nabla^2 \mathbf{E}_t = \frac{\omega^2}{c^2} \tilde{\epsilon}_r(\omega) \mathbf{E}_t \quad (3.31)$$

となる. E_t は

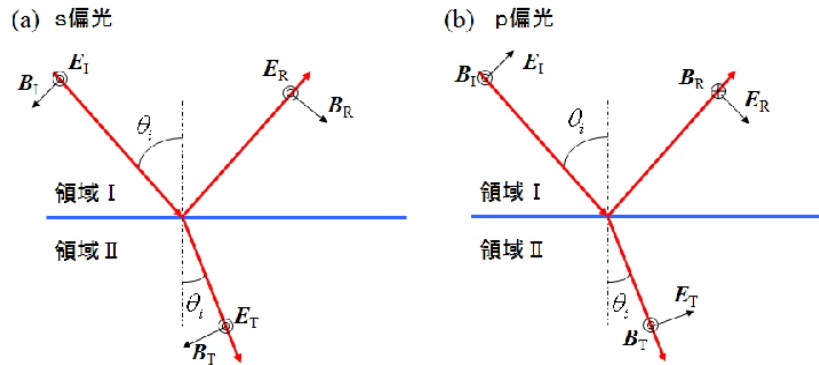
$$\mathbf{E}_t = \tilde{\mathbf{A}}_t \exp \left[i \left(\tilde{\mathbf{k}}_t \cdot \mathbf{r} - \omega t \right) \right] \quad (4.20)$$

なので (3.31) に代入して

$$\left(\tilde{\mathbf{k}}_t \cdot \tilde{\mathbf{k}}_t \right) \mathbf{E}_t = \frac{\omega^2}{c^2} \tilde{\epsilon}_r(\omega) \mathbf{E}_t$$

となるので式 (4.23) が導かれる.

4-3. p偏光の場合の反射係数 (4.31a) と透過係数 (4.31b) を導け.



解答 図 4.5(b) のように電場と磁場の向きを決めておく．このような電場の向きを選んだ理由は，垂直入射 ($\theta_i = 0$) の場合に， E_i と E_r が同じ向きで同符号にするためである．

この場合には B は接線成分しかないので，境界条件は

$$|\mathbf{k}_i| A_i - |\mathbf{k}_r| \tilde{A}_r = |\mathbf{k}_t| \tilde{A}_t$$

である．

$$|\mathbf{k}_i| = |\mathbf{k}_r| = \frac{\omega}{c} n_1, \quad |\mathbf{k}_t| = \frac{\omega}{c} n_2$$

なので

$$n_1 (A_i - \tilde{A}_r) = n_2 \tilde{A}_t \quad (4.3.1)$$

となる．

E に関する境界条件は，接線成分が連続であることより

$$(A_i + \tilde{A}_r) \cos \theta_i = \tilde{A}_t \cos \theta_t \quad (4.3.2)$$

となる．(4.3.1) と (4.3.2) より

$$\tilde{r}_p = \frac{n_1 \cos \theta_t - n_2 \cos \theta_i}{n_1 \cos \theta_t + n_2 \cos \theta_i} \quad (4.31a)$$

$$\tilde{t}_p = \frac{2n_1 \cos \theta_i}{n_1 \cos \theta_t + n_2 \cos \theta_i} \quad (4.31b)$$

が導かれる．

- 4-4. 虚部がない場合の垂直入射 (n_1 から n_2 へ) の反射を考える． $n_1 > n_2$ の場合に反射の位相変化がなく， $n_1 < n_2$ の場合には位相変化が π であることを示せ．

解答 垂直入射なので，s 偏光と p 偏光の区別なく反射係数は

$$r = \frac{n_1 - n_2}{n_1 + n_2}$$

となる． $n_1 > n_2$ の場合には $r > 0$ なので，反射光の電場の向きは入射光と同じ， $n_1 < n_2$ の場合には $r < 0$ となるので，反対向きとなる．

4-5. 式 (4.34) を導け．

解答 導くのに必要な式を並べておく．

$$\frac{\omega}{c} n_1 \sin \theta_i = |\mathbf{k}_1| \sin \theta_t \quad (4.22)$$

$$|\mathbf{k}_1|^2 - |\mathbf{k}_2|^2 = \frac{\omega^2}{c^2} (n_2^2 - \kappa_2^2) \quad (4.24a)$$

$$|\mathbf{k}_1| |\mathbf{k}_2| \cos \theta_t = \frac{\omega^2}{c^2} n_2 \kappa_2 \quad (4.24b)$$

$$n_1 \sin \theta_i = \tilde{n}_2 \sin \tilde{\theta}_t \quad (4.32)$$

$$\cos \tilde{\theta}_t = \sqrt{1 - \sin^2 \tilde{\theta}_t} \quad (4.33)$$

証明したい式は

$$\frac{\omega}{c} \tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t = |\mathbf{k}_1| \cos \theta_t + i |\mathbf{k}_2| \quad (4.34)$$

なので，この式の両辺を 2 乗して等しいことを示す．右辺を 2 乗すると

$$\begin{aligned} [\text{右辺}]^2 &= (|\mathbf{k}_1| \cos \theta_t + i |\mathbf{k}_2|)^2 \\ &= |\mathbf{k}_1|^2 \cos^2 \theta_t - |\mathbf{k}_2|^2 + 2i |\mathbf{k}_1| |\mathbf{k}_2| \cos \theta_t \\ &= |\mathbf{k}_1|^2 - |\mathbf{k}_2|^2 + 2i |\mathbf{k}_1| |\mathbf{k}_2| \cos \theta_t - |\mathbf{k}_1|^2 \sin^2 \theta_t \end{aligned}$$

となるが (4.24a) と (4.24b) を用いて

$$\begin{aligned} [\text{右辺}]^2 &= \frac{\omega^2}{c^2} (n_2^2 - \kappa_2^2 + 2in_2\kappa_2) - |\mathbf{k}_1|^2 \sin^2 \theta_t \\ &= \frac{\omega^2}{c^2} (\tilde{n}_2)^2 - \left(\frac{\omega}{c} n_1 \sin \theta_i \right)^2 \end{aligned}$$

と変形できる．最後の式に変形には (4.22) を用いた．あとは (4.32) と (4.34) を用いて

$$\begin{aligned} [\text{右辺}]^2 &= \frac{\omega^2}{c^2} (\tilde{n}_2)^2 - \left(\frac{\omega}{c} \tilde{n}_2 \sin \tilde{\theta}_t \right)^2 \\ &= \frac{\omega^2}{c^2} (\tilde{n}_2)^2 [1 - \sin^2 \tilde{\theta}_t] \\ &= \frac{\omega^2}{c^2} (\tilde{n}_2)^2 \cos^2 \tilde{\theta}_t \\ &= [\text{左辺}]^2 \end{aligned}$$

となる．

4-6. \tilde{k}_t が式 (4.35) と表されることを示せ .

解答 複素数の波数ベクトル \tilde{k}_t の意味は, 図 4.3 のように, 実部が屈折角 θ_t の方向に向き, 虚部が境界面に垂直 (z 方向) に向くということである . それを表しているのが, 式 (4.36) である . 本文の説明にあるように, 式 (4.35) から式 (4.22) (4.32) (4.34) を使って式 (4.36) が導かれる . したがって, 式 (4.35) は複素数の波数ベクトルの意味を表しており, この表式は通常の実数の角度のときに使うものを同じである . このことは, 光学定数に虚部がある場合でも, 角度を複素数として表せば, 同じ表式が使えることを意味している .

4-7. 反射率と透過率に関して, 式 (4.49) のように角度補正することでエネルギー保存が満たされることを示せ . また, 虚部がある場合には, 有効屈折率 n^{eff} を用いなければいけないことを確認せよ .

解答 光強度 (ポインティングベクトルの大きさ) は単位面積を単位時間に通過するエネルギーなので, 図 4.7 のように光ビームの大きさが変わる場合には, そのことも考慮して全エネルギーでの保存を考える必要がある . 全エネルギーは光強度 \times ビーム面積なので,

$$I_i W_i = I_r W_r + I_t W_t \quad (4.7.1)$$

がエネルギー保存として成立する . ここで, W_i, W_r, W_t はそれぞれ, 入射光, 反射光, 透過光のビーム面積である . 入射角と反射角は等しいので

$$W_i = W_r$$

であり, W_i と W_t の関係は図 4.7 からわかるように

$$W_t = \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} W_i$$

である . これらの関係を考慮して, 式 (4.7.1) の両辺を $I_i W_i$ で割って

$$\begin{aligned} 1 &= \frac{I_r}{I_i} + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} \frac{I_t}{I_i} \\ &= R + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} T \end{aligned}$$

が導かれる .

実際に s 偏光での反射係数と透過係数を用いて計算すると

$$\begin{aligned} R + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} T &= \left(\frac{n_1 \cos \theta_i - n_2 \cos \theta_t}{n_1 \cos \theta_i + n_2 \cos \theta_t} \right)^2 + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} \frac{n_2}{n_1} \left(\frac{2n_1 \cos \theta_i}{n_1 \cos \theta_i + n_2 \cos \theta_t} \right)^2 \\ &= \frac{(n_1 \cos \theta_i - n_2 \cos \theta_t)^2 + 2n_1 n_2 \cos \theta_i \cos \theta_t}{(n_1 \cos \theta_i + n_2 \cos \theta_t)^2} \\ &= \frac{(n_1 \cos \theta_i + n_2 \cos \theta_t)^2}{(n_1 \cos \theta_i + n_2 \cos \theta_t)^2} = 1 \end{aligned}$$

となって，式(4.49)は確認される．p偏光についても，同様な計算で確認できる．

虚部がある場合には， n_2 や θ_t が複素数になるので，例えばs偏光では

$$R + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} T = \left| \frac{n_1 \cos \theta_i - \tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t}{n_1 \cos \theta_i + \tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t} \right|^2 + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} \frac{n_2}{n_1} \left| \frac{2n_1 \cos \theta_i}{n_1 \cos \theta_i + \tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t} \right|^2$$

という式になるが，右辺の n_2 に \tilde{n}_2 を入れるべきか， \tilde{n}_2 の実部を入れるべきかわからなくなる．しかし，これはいずれも間違いであり， n_2 のところには有効屈折率 n^{eff} を入れなければならない．以下でそれを示すために， $\tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t$ の実部と虚部をあらわに書き下すと

$$\begin{aligned} \tilde{n}_2 \cos \tilde{\theta}_t &= \frac{c}{\omega} (|\mathbf{k}_1| \cos \theta_t + i |\mathbf{k}_2|) \\ &= \frac{c}{\omega} \left(\frac{\omega}{c} n^{\text{eff}} \cos \theta_t + i |\mathbf{k}_2| \right) \\ &= n^{\text{eff}} \cos \theta_t + iB \end{aligned}$$

となる．ここで，虚部をまとめて B と置いた．また，これらの式変形には(4.25)や(4.34)を用いている．この表式を用いて，計算してみると

$$\begin{aligned} R + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} T &= \left| \frac{n_1 \cos \theta_i - (n^{\text{eff}} \cos \theta_t + iB)}{n_1 \cos \theta_i + (n^{\text{eff}} \cos \theta_t + iB)} \right|^2 + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} \frac{n^{\text{eff}}}{n_1} \left| \frac{2n_1 \cos \theta_i}{n_1 \cos \theta_i + (n^{\text{eff}} \cos \theta_t + iB)} \right|^2 \\ &= \frac{(n_1 \cos \theta_i - n^{\text{eff}} \cos \theta_t)^2 + B^2}{(n_1 \cos \theta_i + n^{\text{eff}} \cos \theta_t)^2 + B^2} + \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_i} \frac{n^{\text{eff}}}{n_1} \frac{4n_1^2 \cos^2 \theta_i}{(n_1 \cos \theta_i + n^{\text{eff}} \cos \theta_t)^2 + B^2} \\ &= \frac{(n_1 \cos \theta_i + n^{\text{eff}} \cos \theta_t)^2 + B^2}{(n_1 \cos \theta_i + n^{\text{eff}} \cos \theta_t)^2 + B^2} = 1 \end{aligned}$$

となり， n_2 のところに有効屈折率 n^{eff} を用いれば，エネルギー保存が成立していることがわかる．p偏光についても同様にして確認ができる．

- 4-8. ブリュスター角の満たすべき式(4.50)を導け．さらに， $\theta_B + \theta_t = \pi/2$ を満たすことを示せ．

解答 p偏光で反射がゼロとなる式

$$n_1 \cos \theta_t - n_2 \cos \theta_B = 0 \quad (4.8.1)$$

とスネルの法則

$$n_1 \sin \theta_B = n_2 \sin \theta_t \quad (4.17)$$

から θ_t を消去する．

$$\begin{aligned} \cos \theta_t &= \frac{n_2}{n_1} \cos \theta_B \\ \sin \theta_t &= \frac{n_1}{n_2} \sin \theta_B \end{aligned}$$

なので

$$\begin{aligned} 1 &= \cos^2 \theta_t + \sin^2 \theta_t \\ &= \left(\frac{n_2}{n_1} \cos \theta_B \right)^2 + \left(\frac{n_1}{n_2} \sin \theta_B \right)^2 \end{aligned}$$

となり，全体を $\cos^2 \theta_B$ で割って

$$\begin{aligned} \left(\frac{n_2}{n_1} \right)^2 + \left(\frac{n_1}{n_2} \right)^2 \tan^2 \theta_B &= \frac{1}{\cos^2 \theta_B} \\ &= 1 + \tan^2 \theta_B \end{aligned}$$

と $\tan^2 \theta_B$ だけの式に変形できる．あとは整理すれば

$$\tan^2 \theta_B = \left(\frac{n_2}{n_1} \right)^2$$

となり，式 (4.50) が導かれる．

また，式 (4.42c) より， $r_p = 0$ となるためには，分母が無限大になる必要があるので，

$$\tan(\theta_B + \theta_t) = \infty$$

すなわち，

$$\theta_B + \theta_t = \frac{\pi}{2}$$

であることがわかる．また，式 (4.42c) を使わなくても，(4.8.1) と (4.17) から，それぞれ

$$\begin{aligned} \frac{n_2}{n_1} &= \frac{\cos \theta_t}{\cos \theta_B} \\ \frac{n_2}{n_1} &= \frac{\sin \theta_B}{\sin \theta_t} \end{aligned}$$

となるので，

$$\cos \theta_B \sin \theta_t - \cos \theta_t \sin \theta_B = 0$$

が導かれ，

$$\cos(\theta_B + \theta_t) = 0$$

となって， $\theta_B + \theta_t = \pi/2$ を示すこともできる．

4-9. R_\perp と θ から， n と κ を求める式 (4.73) を導け．

解答 式 (4.69) と式 (4.70) から

$$\frac{1 - n - i\kappa}{1 + n + i\kappa} = r e^{i(\theta - \pi)}$$

となる．これを整理して

$$\begin{aligned}1 - n - i\kappa &= [r \cos(\theta - \pi) + ir \sin(\theta - \pi)](1 + n + i\kappa) \\ &= -r(\cos \theta + i \sin \theta)(1 + n + i\kappa)\end{aligned}$$

となり，両辺の実部と虚部を比較した2つの式から， n と κ を求めると式(4.73)となる．